

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

D ä m o n E n t f e r n u n g O r g a n i s a t i o n

【作者名】

双紅

【あらすじ】

ある都市「ニホン」を含む世界各国の街、市村、都市が

「黒いモノ」＝妖魔によって壊滅させられてしまう

数年後

人類の存続は少年たちに託された

彼らはそれぞれの過去の思い、願い、恨み、屈辱、悲しみ、恐怖、それらを人類の生き残る未来と平和な世界への希望と共に妖魔にぶつける。

世界を支配するのは妖魔か人間か……。

完全オリジナルストーリー

ダークファンタジーSS

かつ

初投稿作品長編もの

どうか最後までお付き合いください
「
」

序章 災厄の起源

「ハア、ハア・・・ッ!!!」

少年はただひたすらに背後から迫るこの世のものとは思えない「恐怖」から逃げていた。

実態がわからない、ただひたすらの「恐怖」から・・・。

そこはかつてこの世すべてが集まっているのではないが、
というほど、巨大で発展していた街であった。

そこに行けば何不自由ない生活が約束され、平凡ながらも幸せな人生を歩める。

この枯渴しきった世界で唯一のオアシスであった。
背の高いビル、道路を縦横無尽に走り去る無数の車。
もはやそれは過去の「トウキョウ」と呼ばれた街など非でもなく、
最後にして最大の都市であった。

時は2096年22世紀を迎えるまでは秒読みの頃
その都市は過去の汚名を返上し幾多の時代の波を超え今に至る
それまでには戦争や論争、紛争やデモ、はたまた内乱等数え切れないほどの血を流し、
しかし確実に上に登りつめていった。

かくしてその都市「ニホン」は世界に数箇所しかない都市の中で
過去最大の経済発展を遂げていた。

そこには何万人もの人々がなんの変哲もない平凡な日々を送っていた。

その日までは・・・

その少年、いや男の子と称した方が正しいのだろうか・・・
小学生の少年とまで言ってしまうおう。

その少年は一人家の中から外を眺めていた。
外では同じ年ぐらいの子供達が楽しそうに遊んでいた。

別にこの少年の体がどうということではなく、ただ単に課題が片付かなく外に出れないのだ。

しかし小学生にして既に課題に積極的でない彼は、

半ば今日は外で遊ぶのを諦め眺めることに徹しようとして課題を進めなかった。

本人もわかってわいるが筆が進まないものは仕方がない。

ただ何をするともなく外を眺めていた

かれこれ何時間が経ったのだろうか。

外はすっかり朱く染まり、外で遊んでいた子供達がいなくなってもその少年は子供達が遊んでいた場所を見ていた。

いや、ぼーっと眺めていたというべきかもしれない。

すると不意に眺めていた場所を大きな影が通り過ぎた。

その少年は最初は特になにも感じなかったが

ふと、顔を持ち上げ空の遠くを見ると何やら黒い影が飛んでいた。
黒い影としか表せないほどそれは

現実なのか幻なのか。はたまたホントに影なのか、実態はあるのか。

全くの未知がこの都市の上にあるのだ

先程飛んでいたと言ったが、飛んでるのかすらわからない。

浮いてるのかもしれない、立っているのか、座っているのか。ただ「何か黒いモノがある」としか言えないのだ。

それは少年で表現力が乏しいからではない。誰もソレを認識できないのだ。

その都市には何万もの人がいるが、

誰としてその「黒いモノ」に違和感を覚えるどころか気づいていない。

ならばきつと気のせいなのだろう、

少年はそこで初めて視線を課題に戻した。

と、同時に遠くで爆発する音が響き渡った。

少年は咄嗟に振り返ったが、高いビルに隠れてか

その様子は見えなかった。

ただ空高く登る黒い煙を除いては。

都市は混乱に陥っていた。

爆発から始まり、ビルの倒壊、建物の火事、地面は裂け、乗り物は機能を停止した。

さらには突然人が消えたり、なんの前触れもなく見るも無残なかたちに変わり果てたり

なぜかなにもない空から降ってくるものまでいた。

しかし原因はわからず市民は死の恐怖から逃げるため

我先にと都市の外へ走っていた。

その中にも幼い子供や老人などは踏まれたり

蹴飛ばされたり、押されて角に頭を打ち付けたりと

人災まで出ていたことはいかに都市中の人々が

パニックを起こしていたかが伺える。

聞こえてくるものは悲鳴、悲鳴、罵声。

どうにも収集がつかなくなっていた。

少年はそんな中一人家から外を眺めるだけでいいや、眺めることしかできなかった。

外で起きていることがあまりにもショッキングで

体は硬直し今にも叫びだしそうな雰囲気であったが

何よりも恐怖が少年の体をこわばらせていた。

家の家族はとくに家から飛び出し

外の人の荒波に飲まれていった。

みるみるうちに外は暗くなつたが

燃え盛る炎がその悲劇の舞台を暗く閉ざさなかった

少年の家にも火の手が周り、熱さを実感した頃

初めてその足が動き出した。

少年の心は何を捉えていいかわからず、

もはや自分でも今どんな感情なのかもわからない状態で

外の川沿いを市外に向かって走っていた。

すると突然自分の目の前に「黒いモノ」がそびえ立った。

その「黒いモノ」からは血が滴り落ち

その存在からは異臭を放っていた。

少年はゆっくりと後ずさり背中を向けて今来た道を引き返した。

そっちの道はもうすでに炎の海だとわかつてはいても

あの「黒いモノ」を通り過ぎることやその前で立ち止まることは命の危険があると感じたのだ。

少年は無我夢中で走った。

ただひたすらに。

しかし走った先に「黒いモノ」がいた
手らしき部分で何やら人らしきモノを持っている。
いや、悲鳴をあげた、あれは紛れもなく人だ。
人が捕まっているのだ。

その「黒いモノ」は目の前で人を喰らって見せた。
頭から人から出るとは思えない声と音を立て・・・
血は飛び散り、腰から下は少年の目の前に無造作に投げ捨てられ
た。

少年は動けなかった。

目の前の光景はあまりにも残酷で

あまりにも現実味が無かった・・・

ただ飛び散った血が頬に触れるやいなや

横に偶然あった下水道の入口に潜り込んでいたのは

恐怖からなのか意識的なのか、

気づいたときには息をするのを忘れるほど

必死に走っていた。

もはや下水道も「黒いモノ」が通った後なのか

そこらじゅうに人の残骸が散らばっていたが

そんなものはもう視界に入らなかった。

視界に入ったほうが少年もさぞかし不快に思いながらも

安堵の呼吸くらいはできただろう。

視界に入らない原因はほかでもなく

少年の後を「黒いモノ」が追いかけてきているからなのだから。

「ハア、ハア・・・ッ!!」

少年はただひたすらに背後から迫るこの世のものとは思えない「恐怖」から逃げていた。

実態がわからない、ただひたすらの「恐怖」から・・・。

下水道から出るとそこは真つ赤な世界だった

もはや炎なのか血なのかわからないほどに紅く染まった街と
むせ返る煙と生臭い腐敗した空気に少年は

動けなくなってしまうた。

後ろから感じる足を踏みしめる気配と

影に映る鋭く尖った爪を自分に向かって振り下ろすのは
ほぼ同時だった。

少年は右腕を切り落とされた。

消えゆく意識の中目に映ったものは

どことなく人の面影を持った「黒いモノ」であった

少年はそのまま動かなくなっていた。

序章〈f i n〉

1章 学園 話

ドスッ!

うつ伏せの頭に勢いよく振り落とされたそれは教科書だった。

厚さ実に3センチ!カバンに入れると邪魔なくらいに厚いそれはまさに無防備だった少年の頭を的確に捉えていた

「ぐぶっっっ!!」

おっと二次災害だ。叩かれた勢いでそのまま机に顔面を強打してしまった。

鼻が……。

「よう、リク……。随分な身分じゃねえか。」

ああ、不敵な笑みが見える、公務員の顔じゃねえ。この筋肉ゴリラが……。

授業中寝ていた少年は学園の生徒である

少年は幼少期の記憶がなく名前も忘れていたために周りからリクと呼ばれるようになった

というか周りが名づけてくれた

髪は黒く少々長めで若干ツンツンを連想させるくせ毛が特徴
暗そつな雰囲気もあるが人あたりは普通

夏でも冬服、半袖は着ない

体育等も教室の窓から見学と、一件事情ありげだが

本人曰く「半袖がきらい(体育着込)」「冬服のほうがかっこいいから」だそうで

病弱なわけでもなく至って健康体なのだが
体育の見学の時間の時だけなぜか遠くの空をぼーっと眺めていた
なにかモノを探すかのような目で。

突然何がなんだかわからない人もいると思うが・・・。
そうだな軽くいろいろ説明したほうがいいな。

学園とは

【Damon Entfernung Organisation
(妖魔殲滅組織)】

通称【DEO(ディオ)】の管轄下にある施設で

主に妖魔に対する知識を学ぶところだ。

過去には学校と呼ばれる施設があり

小、中、高学年と大学と呼ばれる同等の施設があったらしいが

学園は小中高一貫、大学は無い以外は

その学校とやっていることは同じだと思う

ちなみに今は学校と呼ばれる施設はなく

学園も日本校、ドイツ校、アメリカ校、ロシア校の4校のみで

リクは日本校に通っている。

【DEO】ドイツが本拠点で配下に強力な軍と俺たちのいる学園を構
え

全面的に妖魔を消し去ろうと働く機関だ。

ドイツ全域と世界各首都に人間保護地域を設置しており

数少ない人間が生活している。

10年前、世界的に妖魔が繁殖し人類を脅かす事件が発生してから
できた国際機関らしい

軍とは先ほど言ったとおり

【DEO】の管轄下にあるもつひとつの施設団体で

実際に妖魔と戦う人たち政府団体のことで
強力な武器と量で妖魔を撃退、殲滅する、というのがお仕事
多方そこに入るための最短ルートがこの学園というわけだ。

最後に

妖魔についてだが

いろいろな諸説あるらしいが

学園では生物の突然変異体と教わっている

妖魔がどれも生物の面影や特徴を模しているが

全てに特徴するのが強靱な肉体と、背中の翼だ。

昔で言うところのガーゴイルやら悪魔やら使い魔、

と言ったところだろうか・・・？

もっともそいつらは想像上の珍獣、妖精等呼ばれていたらしいが

妖魔は実物する生物だ。

普通の銃や刃物も通用する。ただしデカイ

小さいのもは人ほどだが大きくなると3mはある

と、まあ

まだ高等部入りたての俺だが

学園で習った知識はこの程度。笑っちゃうよな。

「なにアホな面下げてポケーっとしてるんだ！全く・・・寝るなよ」

ゴスンっ！

言葉の最後には必ず教科書である。ほんとやめて、痛いから。

「おっと、忘れるところだった、今日から転校生が来る、入ってきたま
え」

「こんな時期に転校生らしい。このクラスとは運が悪かったな。」

廊下から人影がスラリと入ってきた。

1章 学園 第 話

先生の呼び声でスラリと入ってきた人影は女性であった

髪は長く腰まで真っ直ぐに伸び

サラッと流れるようなほど手入れされ

色は鮮やかな紅色（あかいろ）

目も合わせるかのように澄んだ橙色をし

細身、しかし出るところはそれなりに出ている・・・

つまりチョーカワイイ

「転校生の如月 和華（きさらぎ わか）だ。」

如月和華と呼ばれた彼女は軽くお辞儀した

なぜだろうか・・・同級生とは思えない雰囲気を出している
道理で、その後の先生の一言で理由がわかった

「彼女は軍から派遣された生徒だ、失礼の無いよう仲良くしてやって
くれ

如月からも何か一言頼む。」

「どうも如月和華と申します。先ほど説明のあった通りドイツのDE
O軍本部からきました。

ここでは皆様と同じ立場ですので気軽に接してください。」

彼女は随分と礼儀正しく挨拶を終えた。

さすがは軍から来たものというべきところだろうか・・・

本来学園は各地のDEO率いる軍に就くために入学する

よって学園に来るものは軍に入るものが大多数を占めているので
学園では妖魔に対する意識をつけ軍に入ってから
実戦で使える知識と技量を付ける
というのが一般だ

それもあつて学園ではほとんど妖魔と戦う実習はしない
昔のところの体育程度だ

しかし彼女は軍から学園に来た。

つまりは学園をパスできるほどの実力者が
親がたいそう立派なお方なのだろう

「如月はリクの後ろに座ってくれ」

そう言われると彼女はチラツとリクを見ると
迷うことなくリクの後ろに座った。

なんとというか、話題ない。こうゆう時にすぐ話しかけるやつは
ある一種の尊敬をする。そうゆう奴に限って馬鹿だったりした
そうゆうバカは案外近くににいるもんだ

「やあ、如月ちゃん。いや和華ちゃんって呼んだ方がいいかな??」

あのバカは祭草 祇弄(さいぐさ しろう)

背はやや高め、髪の毛は金髪でややツンツン

目はややタレ目制服はややだらしく着ており

ややが多いくせにしっかりとしたチャラさ

あんなんでも寺の息子だ

罰当たり者め

しかしこいつが機転を利かせて俺の呼び名を考えてくれたり
してくれたおかげで俺はここにいれる
なんだかんだ言っただけ長い付き合いだ

「あの、あなたは・・・?」

「俺は祭草祇弄!! いやなんか久々にカワイイ転校生が来たもんだから
思わず気になって声かけちゃった!」

あのバカは、少しは先立つ気持ちを抑えろ

「このバカは如月さんとお友達になりたいんだとよ」

なぜか割り込みフォローする俺

「は、はぁ・・・」

・・・完全に要らん一言だったかな・・・?

「こちらこそよろしくお願いします。」

「あ、あぁ。よろしくな如月さん。」

「よろしくね和華ちゃん」

どうやら俺を含め如月さんに認めてもらえたようだ。
なんだかホッとした。

こうして俺たちは新たな仲間と出会った

「さ、再来週に迫った文化祭なんだけど」。

高校生が一番活気溢れ盛り上がる文化祭が再来週訪れる

「と、とうわけです、うちのクラスはこれでいいかしら?」

いかにもな学級委員長がいかにもなことを言ってクラスの出し物

を決めたらしい

「そうゆうわけだから、リク君、よろしくね」

なんだ？そのルンって感じは・・・

ん？・・・俺がなんだって・・・？

そこでハツと気がつき黒板を見た

それまでめんどくさくて外を眺めながら適当に返事していたので
全く気が付かなかったが

それを利用し企てた学級委員長は恐るべき計画を大々的にかつ開
放的な秘密事項で

黒板にこれを見よがしに大きく書かれていた

俺の黒歴史の鱗片が・・・

1章 学園 第 話

「撮影は自由ですよー！その代わりうちのクラス覗いて行ってねえ」

今日は年に一度学園で開かれる文化祭だ
文化祭といっても昔の文化等は10年前にほとんどが消滅してしまっているから

文化祭というよりはただのお祭り騒ぎなのだが
俺は心底喜べない文化祭となりそうだし、
主に我がクラスの手によって……。

「うげっ……。」

「うっわー……。」

「よくやるよ……。」

「さすがに……。」

周りから明らかに「祭りでもそれはやりすぎでしょ……。」

と言った声が聞こえてくるようだ……。

ああ……神様は俺を見放したんですか……？

いや、見放したのは我がクラスの連中だ。

「いやー、似合ってますよぉー!!リクくうくん、ほんとにいい。ねえ？」
「えっ!あ、う、うん……。そう、ですね?」

後ろから笑いと困惑の疑問語のみで繰り返される大暴投な言葉の
キャッチボールが聞こえる

あきらかボールの言葉は俺のハートにあたり跳ね返って相手に伝わるように

つまり俺は壁パスの壁にされてるわけだが

どうやら受け手の方に悪気は無いようなのだが

そろそろ限界だ……。

「おい、祭草……。さっきからお前は

「どうしたの？バニーちゅあん」

「テメーゴルア!!うっせーんだよ!いちいちっ!」

後ろを歩く大暴投の確信犯である祭草は

アハハハハと笑いながら横のキャッチャーである如月をチラチラと見ている

肝心の如月は俺と祭草のあいだを目線が行ったり来たり

祭草はおそらくフォローを入れて欲しいのだろうが

意図を掴めない如月は何を思ったか俺を見て

「……似合ってますよ……?」

なぜ疑問形なんだアアアアアアあああああつ!

……ってか似合ってるよじゃねえよオオオオオオおおっ!!

突然大声を出した俺に驚いたか

人だかりができた

その中央では腹を抱えてゲラゲラ笑っている男子生徒一人と

バニー姿の男子生徒一名の取っ組み合いだった

みんなカメラで激写

そこにはバニーでかつらも化粧も一切なしで

目を血走らせて怒鳴る俺がさぞかし綺麗に、鮮明に映し出されているのだろう。

「おまえらぁ……いちいちうるせんだよ……ちよつとこい……」。

まもなく騒ぎを駆けつけた担任が駆けつけ場の制裁に。

ゴリラがうさぎを連れて生徒指導室へ

残された人ばかりとピッチャーとキャッチャーは
ポツンとその場に残された。

おい祭草、なぜお前は連行されないんだ……？

服を着替え説教も終盤に差し掛かったところで先生に連れられ外

今度は外の体育器具倉の前でお説教だそうだ。いかにも体育科の先生がやりそうだ。

「せ、せんせえーっ！」

悲鳴をあげて一人の生徒が走ってきた

明らかに様子が変だ。家事でも起きたのだろうか。

すると突然走る生徒の横から大爆発が起き

生徒は跡形もなく消え去ってしまった……。

先生の顔は青ざめその場に膝を追ってしまった

と、同時に先生の上半身が飛び散った。

飛び散る血と漂う生臭さはリクを覆う。しかし見当たらない上半身とその肉は

恐怖よりも嫌悪を撒き散らした。

真横で起きた惨事が体へばりついた。でも
リクはただただ騒ぎのある方へと視線を走らせその場で硬直して
いた。

さらに広がる爆発と悲鳴、叫び声と怒号。

俺はこれをしてる・・・。

その少年は事の起きた騒ぎの中心へと走っていった。